

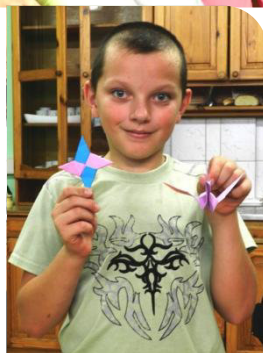
# チェルノブイリの子どもたち



チェルノブイリ子ども基金 NEWS No.98 2014年9月20日発行  
郵便振替口座 「チェルノブイリ子ども基金」 00160-4-98316

## 病気の子どもたちのための特別保養

2014年夏 ベラルーシ「希望」



みなさまの募金のおかげで子どもたちを保養に招待することができました



11/22 (土)「報告会 チェルノブイリと福島の子どもの保養」 詳細は5頁をご覧ください

2015年チェルノブイリ救援カレンダー 完成しました  
お申込みを受け付けています

# 腫瘍病・血液病・その他の病気の子どもたちのための特別保養

## 2014年8月 ベラルーシ「希望」

ベラルーシとウクライナのサナトリウムでの保養が無事終了しました。汚染されていない自然環境の中、安全で栄養バランスのとれた食事をとりながら、心身ともにのびのび過ごすことは、病後の健康回復に大変役立ちます。

### ベラルーシ

場所：児童健康回復センター 「希望」 ミンスク州ビレイカ地区／期間：2014年8月3日～8月26日／参加者：子ども34人（8～17歳）、引率者2人、教育担当者2人

腫瘍病（脳腫瘍、腎臓がん、骨のがん、筋肉のがん、甲状腺がん）、血液疾患、先天性異常（心臓や腎臓の異常、無眼球、鼻腔閉鎖症）、染色体疾患などの子どもたちが参加しました。全員がゴメリ州（主にゴメリ市と周辺の村、他にレチツァ市、ブラーギン市、カリニコヴィチ市、モーズィリ市、ジロービン市などから数名ずつ）で暮らしています。



いずれも移住権利地区または放射線管理地区です。うち9人は、日本の里親から支援を受けている子どもたちでした。この期間中、希望には他にも、汚染地区から学校単位で来ている子どもや、ミンスク市内のスポーツクラブの合宿で来ている子どもたちなど、300人以上が滞在していました。

特別保養の参加者は全員、医師による健康診断書を持参してきます。到着後は「希望」の医師に

その診断書が渡された上で、「希望」でも健康診断を行い、それぞれの子どもに必要な療養（手によるマッサージ、水圧マッサージ、運動療法、薬湯療法、アロマセラピー、塩治療、薬草療法など）が決められます。また、全員が簡単な心理テストを受け、その後の心理カウンセラーによる治療（集団・個人療法）も決められます。

ゴメリ市から引率者として参加した二人の女性（医師と、子どもの手工芸教室の先生）と、「希望」の教育担当者2名が、子どもたちの生活全般の世話をします。子どもたちはみな健康状態に注意を払わなければなりません。他にも注意が必要です。病気のせいで親に甘やかされていたり、両親が離婚をしていたり、家庭が貧しい、などの事情により、心にも問題を抱えている子どもが少なくありません。保養開始後は落ち着きがなかったり、家を恋しがったり、友だちに少し意地悪をしたりなどの問題が見られた子どもも、引率者や教育者、医師やカウンセラーたちの適切であたたかい対応により、徐々に変化がみられるようになりました。大体同じ年齢の子ども3～4人が一部屋で寝泊まりするのですが、同部屋の友だちの影響で、部屋を片付ける習慣がついた子もいました。また、他の子の影響で、人の気持ちを考えることができるようになった子もいました。



食堂の様子



体育館でのスポーツ大会

午前中は決められた療法を受け、「希望」職員による催し物（ゲーム大会やスポーツ大会など）に参加します。昼食前後は自由時間（図書館、体育館、外の遊具で遊ぶ）、昼寝の時間、午後はクラブ活動（シンセサイザー、絵画、陶芸、木工細工、手工芸、デジタルカメラ）に参加できます。夕食前の時間には、子どもたち自身が参加できるコンサートやお芝居などの舞台など、何かしら催し物があります。夜は、アニメなどの映画上映会や、ディスコ（体育館を開放して踊ります）があります。3食の食事の他に、1日3回の軽食（果物、ジュース、お菓子、ヨーグルト等）が出されます。

「希望」は今年9月で創立20周年です。以前は日本から多くのボランティアが参加した「日本週間」が開かれ、さまざまな日本文化の教室が開かれたり、盆踊りを踊ったりしました。今回は、在ベラルーシ日本大使館の協力を得て、「希望」内で「日本紹介展」を開催。着物や日本人形、茶道のセット、世界遺産の寺院などのミニチュアなどが展示されました。初めて目にするものも多いようで、写真を撮ったりして、興味深く見学していました。また、ミンスク市内にある日本文化センター「葉隠」の協力で合気道と日本画教室を、また子ども基金の事務局スタッフが書道・折り紙・盆踊り教室を開きました。子どもたちは好きな教室に参加し、新たな体験をしました。

保養の最終日には再び医師による健診と、カウンセラーによる評価が行われました。その結果を示した書類は子どもたちに手渡され、親や地元の医師たちが今後の治療などに活かしていきます。

### <子どもたちの感想>

◆絵画教室、木工教室、日本週間が楽しかったです。将来は外科医になりたい。日本の皆さん、保養に招待してくれてありがとうございます。（ナスチャ（女）13歳 レチツツァ市◆アロマテラピー、温浴治療を受けた。お医者さんや看護師さんたちがみんな優しくかった。デジタルカメラ教室、絵画教室、ディスコが楽しかった。将来はトラック運転手になりたい。カリム（男）7歳 ゴメリ市◆初めて保養に参加した。コンサートやゲームが楽しかった。新しい友達ができてうれしかった。将来はお医者さんになりたい。ポリーナ（女）10歳 ゴメリ市

### <日本の原発事故で病気になってしまった子どもたちへのメッセージ>

◆将来はきっとよくなると信じて、決して負けないで。ディーマ（男）17歳 ジロービン市◆健康を祈ります。どうか希望を失わないで。ワレーリヤ（女）16歳 ゴメリ市◆小さい子だったら、自分に何が起きたのか最初はわからないと思う。親が一番ショックを受ける。そのあと、大きくなって自分がショックを受ける。私もそういう経験をしました。でも、決してあきらめないで。人生を楽しんでほしい。ヴィオレッタ（女）16歳 ゴメリ市

### <引率者と「希望」職員の感想>

◆仕事の関係で国内の他のサナトリウムも知っていますが、ここほど素晴らしいところはないと思います。設備が充実していること、さまざまな治療のレベルが高いことのほかに、スタッフがみな



日本文化紹介の展示



合気道教室



日本画教室

親身になってあたたかく接してくれることに驚きました。そのおかげで治療を嫌がる子は誰もいませんでした。初めてここに来た小さい子たちは、最初は家を恋しがりましたが、すぐに慣れました。何度かここに来たことのある子は、自分の家のようにリラックスして過ごしました。私が他の用事で忙しいとき、大きい子はちゃんと小さい子たちの面倒をみてくれました。

私には20歳の息子がいますが、心臓の異常があります。この保養に参加した子どもたちもそれぞれ病気をもっています。一目で障がいのがわかる子もいますし、病気や先天的な異常のために妊娠することができない女の子もいます。とても辛いことです。彼らと一緒に過ごすうちにみんな家族のようになり、別れるのが辛いです。帰ってから彼らと連絡を取り続けたいと思います。(I・スヴェトラナ ゴメリ市 医師)

◆今回担当したグループは、さまざまな病気を抱えた子どもたちです。そして性格も才能も本当にさまざまです。精神的にもいろいろな問題をもつ子どもがいました。でも教育によって子どもはどのようにも変わります。教育者の役割の重要性を改めて感じました。参加した年齢の大きい子は、日本からの支援の貴重さをよく理解しています。私からもお礼を申し上げたいです。(P・イリーナ 「希望」教育担当者)

(報告 佐々木真理)

※ウクライナの子どものための保養は8/24～9/7に行われました。詳細は次号(2014年12月号)で報告します。



事務局からのお願い：保養を終え子どもたちは、見違えるほど元気になります。来年も病気の子どもの健康回復のための保養が実施できるよう、ぜひみなさまのご支援をお願いいたします。募金はいくらからでも受け付けています。

## 2015 チェルノブイリ救援カレンダー 完成しました！

\*\*\*\*\*  
2015年チェルノブイリ29周年救援カレンダー  
チェルノブイリ・福島 子どもたちの保養



撮影：広河隆一  
カラー  
見開き A3 サイズ  
(縦 42cm×30cm)

デザイン：  
スタジオ・ギブ

- 定価 1100円 送料別 (2部まで 200円)  
(10部以上：1部 1000円/送料無料)
- お支払方法：お届けするカレンダーに同封の郵便振替用紙でお振り込みをお願いいたします。

☆カレンダーはチェルノブイリと福島の子どものための保養の写真で構成されています。各月の小窓には、ベラルーシのチェルノブイリ被害者家族の写真が掲載されています。

☆カレンダーの収益はチェルノブイリと福島の原因事故による被災児童のための救援金にあてられます。

みなさまからのご注文をお待ちしています。  
周りの方に広めていただくことにご協力いただ

ければ幸いです。また  
カレンダーチラシを配布、あるいは  
置かせていただける個人・団体様  
ございましたら、お送りいたしますの  
で是非お知らせ下さい。どうぞよろ  
しくお願いいたします。

# 報告会 チェルノブイリと福島の子どもたちの保養

■日時：2014年11月22日（土）午後1時半～3時半

■場所：文京区民センター 3C会議室 ■最寄駅：地下鉄 春日駅（大江戸線・三田線/A2出口  
真上）後樂園駅（丸ノ内線・南北線/徒歩3分） ■参加費：500円

今年の夏に行われたチェルノブイリと福島の子どもたちの保養についての報告会を開催します。  
ベラルーシの里子訪問の報告も行います。

\*チェルノブイリの子どもたちの保養（ベラルーシ「希望」）：佐々木真理（チェルノブイリ子ども基金）

\*福島の子どもたちの保養（沖縄県久米島「沖縄・球美の里」）：大場真喜子（未来の福島こども基金）

\*「ベラルーシの里子を訪問して」：清水玲子（チェルノブイリ子ども基金）

\*「希望」20周年式典に参加して：向井雪子（チェルノブイリ子ども基金）



## \*\*\*\*\* ニュースレター「チェルノブイリの子どもたち」のご購読について \*\*\*\*\*

ご支援いただいているみなさまへ

チェルノブイリ子ども基金にいつもあたたかいご支援をいただき、誠にありがとうございます。

子ども基金は91年4月に設立以来、多くの方々に支えられ、これまで活動を続けてまいりました。しかし、チェルノブイリ事故から28年が経過する中、報道が減ったり、人々の関心が薄れていったり、また国内外の災害・紛争などの被災者救援の必要性などにより、子ども基金への募金が減少してきています。特に2011年3月の東日本大震災・福島原発事故後は、国内の被災者救援が緊急課題となり、子ども基金も、イベントやカレンダー収益の一部を、「未来の福島こども基金」を通じて、福島の子どもの支援に充てるようになりました。これらの事情により、とくにここ数年、活動費の確保が厳しくなっています。

一方で、チェルノブイリ事故の影響により、病気になるったり命を落とす子どもがいるという状況は、いまだに続いています。今後、子ども基金は、活動の規模を縮小しなければならないのは必須です。しかし、援助を必要とする子どもがいる限り、できるだけ活動を続けたいと願っています。救援活動費を確保するために、事務局では今後も事務経費などを節約していきます。

ニュースレターにつきまして、以下の変更をいたします。

・これまでは年4回発行してきましたが、経費削減のため、2015年からは年3回発行といたします。

・これまではニュースレターをみなさまに郵送後、約1か月後に、子ども基金のホームページに掲載してきました。今後はニュースレター発行後、すぐにホームページへ掲載いたします。

・これまでは、一度募金をいただいた方には数年間ニュースレターをお送りしてきましたが、これからは、1年間募金のない場合には、ニュースレターの発行を止めさせていただきます。

また、みなさまへのお願いがございます。

●これまで郵送で受け取っているみなさまの中で、ニュースレターはホームページでご覧になり、郵送は不要という方がいらっしゃるようでしたら、お手数ですが事務局までお知らせいただけませんか。その際、E-mailアドレスもお知らせいただければ、事務局からの連絡事項はメールでお送りいたします。

●これまで通り郵送での購読を希望の方は、年間購読料2000円をお願いいたします。

どうぞご理解、ご協力いただけますよう、今後ともよろしくお願いたします。

## 講演 広河隆一「チェルノブイリと福島」(後編)

チェルノブイリ子ども基金は、医療施設を作るために「希望21」から協力を要請され、支援しました。子どもたちは、自分の町の医者からカルテをもらって来ているのですが、現在の病気、症状などを把握して、それに対してどのような療法が必要かをここで決めていきます。絵画・図工教室、音楽室などの設備も日本から送りました。

この焼き物の窯は15年ぐらい前に私たちが贈った窯です。壁にあるのは子どもたちが焼いたものですね。それぞれの保養期間中にいろいろなク

ラスを体験します。

左の壁に飾ってあるのが、日本から贈られたパッチワークキルトです。「原発はいらない」

「健康を祈る」

などのメッセージが書かれています。「大地よ、よみがえって」という言葉もあります。昔日本からチェルノブイリに贈ったメッセージが、そのまま日本へ向けてのメッセージのようです。

### 【甲状腺の手術をした子どもたちの保養】

ベラルーシの子どもたちと一緒に、ウクライナの子どもたちも招待しました。インナ\*もいました。「日本週間」という企画で、費用も全部日本が出す形でやりました。そのときにボランティアの自己紹介などを書くノートを、「パスポート」という形で作りました。この方は心理療法の先生で——子どもたちの血液検査とかをする医者もいるのですが——同時に、心理療法、ストレスはどういうものか、トラウマをどのように克服したらいいのかなど、そういうことを担当する先生です。教材の一つとして私たちが作ったパスポートも使われていました。スポーツ文化センターも半分は日本がお金を出しました。医療棟ですが、こんな立派な建物です。この男の

子は、背骨が曲がっているのを、保養中に治そうということで治療をしているところです。水を使った治療とか、いろいろな形があります。ハーブティーも、症状ごとに違ったのを飲ませたりしています。



チェルノブイリ原発から30キロ圏の模型、子ども基金が贈ったものです。日本では子どもたちにはなるべく知らせないように、「安全」ということでやっていますが、ここではきちんと子どもたちに教えることが、プログラムに入っています。どんなに医療とか科学とかが発達していても、チェルノブイリのような被害が起こったときに対応できるのは保養ぐらいしかないということです。一人ひとりの対処療法はありますけれども、それ以外には保養しかない。対処療法といっても、甲状腺がんを取り除くといったような方法しかない。発症を防ぐという形でのやりようはないのです。

### 【土壌の汚染、除染】

除染については、「自分たちはもうあきらめた。人々が住んでいるところ、学校などはいいと思うけど、実際には土地は広大にあって、不可能だ」と言っています。福島事故のあとに日本にも行って、そんなことはやらないほうがいい、無意味

だ。それよりは人々を逃した方がいいと提言したそうですが、それらはまったく守られていません。

事故当時、ベラルーシの副首相だったケベックという人は



チェルノブイリ委員会の議長になりました。チェルノブイリ委員会というのは、被害対策のすべてを扱うところです。後に非常事態省という名前になっていきますが、それを率いた人です。彼が保養は必要だと言い出しました。法律をつくる一番の中心となっていった人です。「チェルノブイリ委員会の議長になったときに直面した一番難しい問題は何でしたか？」と質問したら、「私たちが住民に対して信頼を得ること。それが一番難しかった」と答えていました。「人々は政府の情報を信頼していなかったということですか？」「そうです。ソ連政府が国民から真実を隠していたことが大きな原因です」と。「でもそれはソ連という国の特徴だけでなく、原発の事故、原子力潜水艦などの事故でも、ほとんどの国が、事故が起きたときにまず隠すという性質を持っています。人類が、そういう性格で、実際にはよく見せようという気持ちになるのでしょうか。ですからそういう情報は、事故の進行状態の中でかえって噂をよぶ、自分たちを信頼しないということに繋がっていききました」

「住民に正しい情報、隠されていた情報を伝える努力はされたんですか？」と聞いたら、「自分が10年間務めた間に、個人や組織、あるいはその地域に対して一度も嘘をついたことはありません。ですから続けられたのですが、これは一番難しいことです。でも、大切なのは人々の信頼です。それが仕事を行う上で、もっとも大切なことだと彼は言っていました。

日本からも重松逸造氏とかIAEA関係の医者たち——重松というのは山下俊一氏の師匠だった人ですね——長瀧も山下もみんなチェルノブイリに行ったわけですが、そういうような人間たちが、「甲状腺がんは放射能の関係はない」「多発というものはない」ということをずっと主張していました。それに対して、放射能のせいでこういうことが起こっているということを、自分は専門家でも医者でもないけれど言い続けた」と言っていました。でも、それを正すことができなかつた。

彼は日本も訪れ、重松氏や広島放射線研、IAEAなど、いろいろ訪問します。でもチェルノブイリ

に関する資料でさえ、ベラルーシから来ているのに、まったく隠されて見るができなかつたと言っています。

「DAYS JAPAN」の去年の号、福島市の人が住んでいるところ——汚染の数字を見せながら、「いま現在、日本では子どもたちはこんなところに住んでいます」と話すと、みんな絶句します。なんでここに住んでいいと考えるのか信じられないということですね。「子どもの学校を開いているのは年間 $3.8\mu\text{Sv/h}$ と言われていますが、どう考えますか？」と聞くと、「年間 $1\text{mSv}$ 以下に、とにかく学校とか子どものいるところでは厳しくすべきだ」と。

### 【ベラルーシの甲状腺がんの権威者】

山下も甲状腺学会の理事長ですし、長瀧もみんな甲状腺関係の医者です。そういう人たちが訪ねて、日本船舶振興会の関係でもずいぶん子どもたちを診た。でも、彼らは一切治療はしなかつたと言っていました。このキエフの内分泌研究所は、ウクライナ中の子どもの甲状腺がんの手術をする場所です。ですから、すべての統計がここにはあります。

「日本では事故が起きたときに、安定ヨード剤を人々に与えなかつたことを知っていますか？」と聞いたら、「自分たちのところで失敗した。その失敗を追及したような医者たちが日本にいるのに、なぜまた同じことをするのか。あるいは学ばなかつたのか」と、本当に驚いていました。

### 【今も甲状腺がんが発症】



20数歳の女性たちですね。そういった人たちの間で、また甲状腺がんが多発しています。

### 【チェルボナ・カリーナ】

事故から10年目のときに、チェルノブイリ子ども基金が招待して、日本各地で歌を歌ったり踊ったりしました。彼らの団体の設立趣旨は「チェルノブイリのことを忘れないで」ということで、それを日本のほうで支えてきました。とっくにつぶれてしまったかと思っていましたが、まだ続けていました。日本の舞台上で踊った子どもたちが今、先生になっています。

### 【イリーナ・ミハイロワ】



イリーナは子どものとき甲状腺がんの手術をしました。日本の支援で保養させたりしています。「日本の事故が起きたとき、どう思いましたか？」と質問したら、先ほどインナ\*も言っていました。「日本にこのような事故が起きたことはとても残念です。心から同情します。私たちも同じ経験をして、手術をして、こうして元気になっています。あきらめずに、一生懸命、進んでください。必ずよくなります」そういうことを言っています。私たちにとって、甲状腺がんというのは未知です。それを宣告されたとき、子どもたちの心に何が起こるのかわからない。それは、トラウマの研究者とかそういう人でもわかりません。専門家に聞いたこともありましたが、トラウマというのは「ポスト・トラウマティック」といって、かつて起こったことを時間がたって客観的に見つめることができるようになったときに快復が始まるそうです。

しかし、放射能というのは現在進行形で、永遠にポストにはなりません。だからそれに対してどのような対処の仕方があるのかわかりません。これは日本のこれから大きな課題になっていきます。

### 【ナターシャ・コンツェヴェンコ】

ナターシャは、手術台上がったときに泣き出してしまいました。このまま自分は死んでしまうのではないかと。その恐ろしさは外からみてもわかりません。子どもたちが、自分ががんだと聞いたとき、手術をしなくてはならないと聞いたとき、しかも首に手術するという、本当に恐ろしいことですよね。私たちには経験がないからわかりません。何が必要なのか、どういう言葉でその子どもを助けることができるのかわかりません。チェルノブイリでもすべてそういうことに答えが出たわけではありません。いまそういった子どもたちがその後どういう人生を送ってきたか、どう闘ってきたかを聞くような機会が、日本で必要になってきます。

ナターシャの場合は手術が早かったから助かりました。時期や場所にもよりますが、手術したときには甲状腺からほかのところにがんが転移してしまっていることも多かったのです。それが命取りとなってしまう場合もあるのですが、日本の専門家たちは、心配ない、子どもの甲状腺のがんはゆっくり進むものだとか言っています。2年間くらい放置していても大丈夫だ、そんなことを言っているのです。ナターシャは2人の子どもの母親になっています。

「私も甲状腺手術を受けた一人ですから、そういう困難を乗り越えて、元気な子どもを産みました。子どもたちのためにも、将来に向けて力いっぱい生きていきたいと思います。ぜひみなさんにもがんばってほしいと、心の中で思っています。絶対に困難は乗り越えて、絶対によくなります」そう言っていました。

「このような悲劇を起こさないためにはどうしたらいいですか？」と聞いたら、彼女は一言「簡単なことです。原発をつくらなければいいのではないのでしょうか」

(2015年救援カレンダーの表紙はナターシャと2人の子どもたちです。)

\*今年4月に子ども基金が招待し、講演をしたシネオカヤ・インナさん



## 【沖縄・球美の里】

久米島に保養施設をつくりました。7月で2年になります。これまでに1,000人を保養させました。私たちの課題も、とにかくここで、きれいな空気と自然の中で、汚染されていないものを食べて、あれだめ、これだめということから子どもたちを解放し、ストレスのない生活を送らせる。短い間でも、子どもたちに抵抗力を植え付けるといことを信じて、私たちは希望21のようなものをつくりたいと思ったのです。

最初、海の近くのところを借りようとしたのですが、津波の記憶がある人たちも多かったので、山の方を選びました。

真っ白なピラミッドの形をした建物（かつて登り窯でした）、その中で子どもたちは遊んでいます。



ドイツの輸入玩具を扱う会社が寄付してくれたドイツのおもちゃでいっぱい建物です。図書館には全国の人たちからたくさん本を寄贈してもらっています。

## 【歓迎する久米島の人たち】

私たちが心配したのは、地元の人たちが本当にこのプロジェクトを歓迎してくれるかどうかでした。でも久米島の町議会は全会一致で決められました。PTAも教育委員会も、観光協会他も、婦人の会とかもここを支えるということを決めました。島から何を学ぶのか。戦争中に、日本軍からたいへんな思いをさせられた。そのはるか前、琉球政府の頃からですが。

私たちは小学校以上の子たちが現地に行ったときには、慰霊碑を訪ねたり、島の人たちから歴史を学ぶ、そういったことをしています。

ここで初めて海に入るという体験をした子、砂遊びを経験する、泥遊びをする。そういうことを全部久米島で初めてという子どもたちも多いです。

到着したその日か翌日に、お母さんたちだけが集まって交流会をします。子どもが寝たあと。そうすると、ここに来るまでがどれだけ大変だったかという話をします。保養したいということは、いまの場所が危険なのかと、家族や周囲の人たちから非難されるわけですね。みんな本当に孤立してしまっています。どうしたらいいのか、悩みをしゃべる場所もない。いわきでは、そういったお母さんたちのグループ、集まりがありますが、私たちはここを「ママカフェ」と呼んで、集う場所になっています。



汚染の数値をどう判断すればいいかということですね。チェルノブイリの人たちは絶句します。こんなところに子どもを住まわせていいはずがないじゃないか、なぜ逃げないんだと。

自分たちが間違っているのか。チェルノブイリの人たちが間違っているのか。どっちなんだ。チェルノブイリの人たちは、安全で、人が住むのに平気な場所から家を捨てて立ち退かされているのか、ふるさとを廃墟にしていたというのか。事故から3年目のときは、チェルノブイリで人々の不安は最高に高まっていたときです。でも日本は3年たって、不安が高まるのではなく、「もう安心だ」という空気になっている。いったいこれは何なのか。考えていきたい。

(文責・向井雪子)

※4月24日に文京シビックホールで行われた講演録です。前号と合わせてお読みください。紙面の都合で一部割愛しています。講演会の動画はホームページでご覧になれます。

(ロゴ作成は宮崎駿さん)



# 2014年5月 家族訪問 ベラルーシ(1)

報告 佐々木真理

5月末のベラルーシでは、最高気温が29・30度などの異常に暑い日が続きました。また突風や局地的な豪雨もあり、自家菜園をしている人たちは、植えたばかりの苗がみんなだめになってしまったと嘆いていました。物価の高騰で、以前よりも家庭菜園をする人が増えているという話を聞きました。病気の子どもをもつ家族の生活にも、負担が増えています。日本の里親から支援を受けている家族を訪問しました。

## L・サーシャ 2003年生まれ レチツァ市

脳腫瘍。音楽の才能があり、歌、フルート、バイオリン、ピアノを習っている。国内のコンクールで入賞した経験も何度かあり、家の中にあるテレビやパソコンなどはその時の入賞商品。入賞者としてパリやペテルブルクに旅行もしたという。「そんなにいろいろ習ったり、コンクールに出場したりするのは、サーシャの体の負担になりませんか？」と聞くと、「本人がやりたいと言っているのです。好きなことをやって、おかげで、うちでは買えないものをもらったり、外国に行けたりします。そんなことでもなければ、どこにも行く機会などありません」と母は答えた。姉のナターシャ(1995年生まれ)も脳に腫瘍がある。専門学校に通っていたが、体調が悪くなり退学してしまった。サーシャ

にはもう一人姉(1997年生まれ)がいたが、12年前に脳腫瘍で亡くなっている。母親は皮膚の腫瘍の手術を受けた。甲状腺にも異常がある。両親は離婚している。父親はアルコール依存症になり、両親は離婚した。父親から家族への経済的援助を何も無い。

## M・ダニーラ 2001年生まれ

### スヴェトログルスク市

脳腫瘍。腫瘍はすべて取り除かれていないため、今後も検査が必要。腫瘍が急激に大きくなればさらに治療が必要。放射線の照射治療は体に負担が大きすぎるため、両親は他の治療方法を自分たちで探している。ロシア・モスクワの専門病院で、ベラルーシでは行われていない治療法があると聞き、検査に連れて行った。検査費・交通費や、子どもが入院中の親の滞在費など負担は大きい。しかし両親は、どんなことをしてでも子どもを救いた



(左：姉ナターシャ、右：サーシャ)



(両親とダニーラ)

いと思っている。祖父母は年金生活でお金に余裕はないが、下の子どもの面倒をみたり、家族を精神的に支えたりしてくれているという。ダニーラは成績がよく、特に英語が得意。病気になる前は、いろいろなクラブ活動にも積極的に参加していた。現在は自宅学習をしている。

#### V・アンドレイ 2002年生まれ

##### ゴメリ地区ノーヴァヤ・ミリチャ村

2006年に白血病と診断され、化学療法を受けた。現在は半年に一度、定期検査を受けている。背骨の側湾症の他には、体調は安定しているが、視力の低下があり、頭痛と足の痛みなど訴えることがある。マッサージ治療は禁止されていて、水泳を勧められている。現在は、頭痛時に痛み止め飲む以外には、薬は服用していない。チェルノブイリ障がい児に認定されている。18歳までは障がい児手当が支給されるが、その後は認定の再審査が行われる。

家族は以前、村の木造一軒家で祖父母と同居していたが、アンドレイの障がい児特典により現在のアパートを得た。ゴメリ市郊外の、畑に囲まれたのどかな風景な村だが、周囲には化学工場などの企業があるため、環境的にはあまりよくないという。「でもここは静かですし、学校も幼稚園も店もすぐ近くにあり、住みやすいです」と母親は話した。アンドレイは、家の裏手の空き地で友達とサッカーをしたり、近くの川



で魚釣りをしたりするのが好きだという。アンドレイには4人の妹がいる。父親はトラクター運転手。

#### L・カリナ 2002年生まれ レッツァ市

脳腫瘍。2006年に発病、手術、治療を受けた。その後2012年より意識を失うような発作が起き始め、さらに治療を受けた。チェルノブイリ障がい児に認定されている。以前は母方の祖父の家で暮らしていたが、最近アパートに引っ越したばかりという。訪問時、壁はコンクリートがむき出しのままで、荷物の入った箱が床に並べたままだった。娘が病気になってから、母親はとても神経質になったという。訪問した時も、「こんなひどい状態の部屋にお招きするのは申し訳ない」と、初めは大分緊張気味だった。カリナの方が、落ち着いて受け答えしていた。

カリナは絵画や彫刻が好きで、美術教室に通っている。1歳年下の妹がいる。母親はカリナの介護手当を受けている。両親は離婚しているが、父親は時々家を訪れ、食品を持ってきたり、娘たちの勉強をみたりしているという。



(アンドレイと一番下の妹) (母親とカリナ)



## 里親のページ

2013年8月、私は最初の里子だったペーチャの住むウクライナのザボローチェ村を訪れました。キエフから車で西へ5時間ほどのベラルーシとの国境沿いにあります。いくつもの町や村を過ぎ、人気のない野や森をぬけて、何と遠くへやって来たのだらうと思ったものです。

ペーチャの里親になったのは1999年でした。すぐに彼の母親からお礼の手紙が届き、彼女とは年齢も一緒にその後も文通が続いています。当時17歳だったペーチャもすでに31歳。前年には同じ村の女性と結婚して実家の近くに住んでいます。彼は健康上の理由から、定職にはついていませんが、以前コンピューターを習っていて、今もいろいろ役立てているようです。

ペーチャは今、自分たちの家を建てています。兄弟や友人たちに手伝ってもらいながら本当に自分で建てたのです。私が行った時は基礎の部分ができただけでしたが、先月もらった手紙では内装に移り、今床を造っているそうです。自分の体調も考えながらの作業で、完成まではまだしばらくかかりそうです。村ではほぼ自給自足の生活です。電気は引いてありますが、ガスや上下水道は整備されていません。母親は村の学校の教師ですが、父親は失業中とのことでした。しかし農業をはじめ、何でも自分たちでしなければならぬので結構忙しいようです。子どもたちも本当によく手伝います。手伝い以外にも、ペーチャの兄は牛を育てて売り、学費にしたそうですし、ペーチャも蜂蜜を集め売っていました。

畑ではいろいろな野菜を育てていて、鶏や牛や豚も飼っています。それらでいろいろなごちそうを作って毎食すすめてくれるのですが、その量が半端でない。私はいつもの倍ぐらいの量を一生懸命食べました。普通の家庭料理ですが、なかなか美味しかったです。お返しに私も海苔巻きと炒飯を作ってみました。多分口に合ったらしく、おいしいと全部食べてくれました。また、帰るときには自家製のトマトのピクルスやベリーコンポートなどいろいろ持たせてくれました。



今回の訪問は3回目です。ペーチャは6人兄弟で、小さかった弟妹たちもすっかり大きくなり、進学したり結婚したりで実家を離れています。姪や甥も行くたびに増えていて、いつも家族みんなで大歓迎してくれます。村には親戚も多いのでなかなか賑やかです。彼らといろいろ話がしたくてロシア語の辞書を見ながら何とか会話を試みるのですが、思うようにならずとても残念です。ペーチャはずっと薬を飲んでいますが、今のところ大きな不調はないようですのでこのまま元気に暮らしてほしいと思います。できればまた会いに行けたらと思います。今度会える時にはペーチャの家も完成しているでしょう。みんなと一緒にまた楽しい時間を持つことを願っています。

(原田 真理子/山口県)

※ペーチャ(83年生まれ)は15歳で甲状腺の手術を受け、その後も放射性ヨード治療が続きました。原田さんは、子ども基金を通じての里子支援(1999年~2008年)を終了した後も、家族と交流を続けていらっしやいます。



## 人はなぜ病気になるのか <その1>

### 1. 人は環境に適応できない時に病気になる

◆人は、生活する環境に適応できない時に病気になるのです(病原環境論または適応説という)。環境には、自然環境(細菌やウイルス、寄生虫や動植物、花粉などを含む)、社会環境(家族から地球規模までの人間社会)、心理または情緒的環境(社会がもたらすストレス)があります。特に現代では、社会的環境が大きく、家庭、保育所、幼稚園、学校、職場、地域、クラブなどの人をとりまく環境が、心理・情緒的ストレスを産み、それによって抵抗力(免疫)が低下し病気になるのです。

◆判りやすく説明するために、人間を川に例えます。川にはそれぞれ堤防があり、川の水が少なく静かに流れている時は、水はあふれませんが、この状態が、人間では健康なのです。ところが大雨や台風で、川の水が増えてその堤防の弱い所を越えて氾濫し、水があふれ出ます。人間では、水があふれた時に病気になるのです。堤防の弱点は、その時々によって異なります。その人の弱点は親から受け継いだ遺伝と生まれ育った環境や今までにかかった病気、現在の生活習慣やおかれた生活環境(自然や社会的)によっても作られます。その人の持つ弱点は年齢、性別、性格によっても異なるので、かかる病気が異なるのです。

◆ヒトゲノム計画により、人の遺伝子がほとんど解明されました。そこで判ったことは、同じ遺伝子を持っていても、同じ病気になるとは限らないということです。多くの遺伝子は、遺伝子にスイッチが入ると働き出し、スイッチが切れるとその働きを止めるのです。スイッチを入れるのが環境因子であることも判ってきました。遺伝子と環境の相互作用。

例えば、哺乳類のほとんどは、乳児期には母乳が飲めるが、幼児期になると飲めなくなります。それは、幼児期になると母乳を分解する酵素を作り出す遺伝子のスイッチが切れてしまうからです。しかし、人間はなぜ大人になっても母乳が飲めるのかが謎です。でもすべての人がそうではなく、牛乳が飲めない人がいて、その率は農耕民族に高く、牧畜民族に低いのです。環境に適応して遺伝子が変わってきたと考えられています。牛乳嫌いや牛乳を飲むと下痢をするのは別に特別ではないのです。

例えば、遺伝的に同じはずの一卵性双胎児の一人が喘息になり、もう一人が喘息になる確率は16~25%であり、他のアレルギー疾患では同じと見られています。アメリカの調査で、アイルランド出身の双子の、一人はアイルランドに残り農業を継ぎ、もう一

人はアメリカへ渡って都市労働者になった1,000組を比較したら、摂取カロリーはそれ程違わないが、成人病になる確率はアメリカに渡った方が圧倒的に高かったのです。

遺伝子にスイッチを入れる環境は、自然環境と社会環境です。社会環境の中に、社会によってもたらされる精神心理的、情緒的環境も含まれます。家庭も社会的環境です。だから家庭環境によっても変わるし、食生活によっても変わります。また、環境によっても遺伝子は変化します。遺伝子と環境とは相互に影響しあって、発現したり、しなかったりし、その結果病気になったり、ならなかったりするのです。遺伝子は1世代で100の変化を蓄積すると言います。遺伝子は環境条件に左右され、ある種の環境でなら、ある形で発現するのです。遺伝子は、環境や発達に左右されない特定性と、環境の変化に適切に対応する能力(可塑性)を持ちます。

### 2. 病気と戦う仕組み

◆人には病気にならないようにする防御システムが様々な働いています。

①外から人の身体に入ってくる場所すべてに細菌やウイルスなどの微生物が住み込み人と共棲していて、外来の微生物と戦ってくれます。例えば大人の皮膚1平方cmに10万の微生物が住んでいます。だから大人は「とびひ」にならないのです。目、鼻、口、のど、耳、陰部、腸などすべての外界と接する部分には微生物が住んでいます。それが病気にならない理由の一つです。胃には強い酸性の胃液があり、多くの細菌はそこを突破できません。突破しても小腸には1gの腸内容物に三千億から五千億の細菌や微生物が住んでいて外来の微生物を排除してくれます。皮膚や腸に住んでいる種類は家族ごとに微妙に異なりますし、老化によっても変わります。

②体内にはまずリンパ球をはじめ、リンパ組織(扁桃やリンパ節や虫垂)が働いて防御線を張っています。外来の異物を見つけ、戦うのも、抗体を作るのもリンパ球です。インターフェロンやサイトカインというものを作るのもリンパ球です。リンパ球はいろいろな働きをして微生物や異物、がん細胞などと戦ってくれます。その他に多くの身体の働きで、自分の病気を治す力(自然治癒力)があります。がんになっても、少なくとも3万人に一人は自然治癒します。世界でその人たち3,500人の報告も出ています。

<次号へ続く>

黒部信一：すずしろ診療所所長 小児科医師

黒部信一のブログ <http://kurobe-shin.no-blog.jp/>

# ふくしま便り

## 被災地のいまを訪ねる

東日本大震災が発生した 2011 年 5 月の連休、自分の目で被災地の状況を見てみたいと考え、宮城県石巻市へ全国の教職員と一緒に災害復興ボランティアとして参加したのが始まりでした。当時は、被災した住宅の床下の泥出し、避難所での支援物資の配布、お盆前にはお墓を掘り起し清掃するなど貴重な経験をしました。

大震災から3年半が経過し、徐々に復興が進んでいると言われる中で、「宮城災対連・共同支援センター」が県内の仮設住宅で月に1度開催する“炊き出し&何でも相談会（法律、医療、建築等）”で支援物資を配付するボランティアとして被災地に関わっています。

当初は、多くの仮設住宅を訪れ「眠れない」「先が見えない」などの声を聞く中で、若者が弱い立場の人を虐め、物を壊したり、高齢者が物を大事にするあまり物集めに執着し、敷地の一角を占領したり、また自治会の成立・運営が出来ないなど難しい問題も見聞きました。私自身も大震災という状況下におかれた時には、同様な行動を取ったり、問題に直面していたのではないかと思います。どの仮設住宅でも自治会長のあいさつで「私達の事を忘れないでほしい」と言う切実な願いがあり、心に残る言葉でした。現在、土地の嵩上げ、災害復興住宅の建設が進む中で、スーパーや医療機関などが隣接し交通機関のアクセスが良い所では、仮設住宅から出たがらない方もおられるようです。被災者の高齢化が進む中で、被災地での復興の進み具合など格差が生じる事が一番心配されていた

ところで、これからの課題でもあります。

この夏 8/2~4、福島県内の被災地を訪れ、震災当時のままの倒壊した建物、長く伸びた草むらから見え隠れする撤去されない車両や漁船をみて進まぬ復興に憤りを感じました。ただ、変わったのは至る所に設置されたモニタリングポストの存在で、実際地表面の放射線量を計測したところ線量計が約10倍近い数字を示していたのには驚きました。除染作業を進めている村を訪れた時、作業は日曜日のため休工中、防護服を着用した作業員の姿は無く、放射性物質の厳しい現実を直視する事はありませんでした。

今、被災地の教職員は、阪神・淡路大震災の経験を教訓に3年目を迎えた今が大切と子供たちの心のケアを中心に尽力しています。また、全国各地でこの夏休み中子供たちを保養する目的で、個人、NPO、労働組合等がいろいろなイベントを開催しました。これからも被災地に目を向け、自分のできる範囲で支援を継続していきたいと思います。もう東日本大震災や原発事故が話題にもならないような風潮にあります。避難している多くの方々が一日も早く元気に笑顔で本来の生活を取り戻せることを心から願っています。

文・写真 飯吉 正志人

（飯吉さんは、子ども基金のボランティア、里親にもなっています。）

写真左：浪江町商店街／中央：飯舘村。除染で出た土が黒いビニール袋に詰められ路上に置かれている。／右：飯舘村役場前のモニタリングポスト。数字は0.67マイクロシーベルト。





# 募 金 ・ 救 援 状 況



● 募 金 状 況 2014 年 6 月 ~ 8 月 (単 位 : 円)

	6 月	7 月	8 月
募 金 件 数	129 件	208 件	71 件
救 援 寄 付 金	575,176	598,530	319,499
保 養 費	141,990	145,450	44,003
特 別 保 養 費	35,000	105,000	35,000
里 子 支 援	80,200	1,844,580	174,480
ニ ュ ー ス 購 読 費	40,000	54,000	28,000
イ ベ ン ト 賛 同 金	3,000	1,000	1,000
<b>合 計 (円)</b>	<b>875,366</b>	<b>2,748,560</b>	<b>601,982</b>

● 救 援 状 況 2014 年 6 月 ~ 8 月 (単 位 : 円)

<ウクライナ>

◎ 子 ども ち の 生 存

里子支援 12 人 (7~12 月分) 398,814

緊急支援 1 人 30,678

<ベラルーシ>

◎ 希 望 21

病気の子どもの保養 2,037,773

◎ 困 難 の 中 の 子 ども ち へ 希 望 を

里子支援 53 人 (7~12 月、10~15.3 月分) 1,620,420

緊急支援 2 人 61,530

奨学生支援 1 人 30,771

♥ 募 金 団 体 名 一 覧 ♥

紙面の都合上、個人名は省略させていただきます。多くの方々からご寄付をいただきました。みなさまに心より感謝申し上げます。  
(順不同・敬称略)

【6 月】トランスフェリックマネジメント/みえ 426 の会/子どもたちの保養を考える会 くまもと・山都町/(株)ジョイメイト/リサイクルグループ カリーナ/西小岩幼稚園/(有)ユーロアール/6.21 やめてんか! 原発再稼働

【7 月】ケイ歯科クリニック/トランスフェリックマネジメント/おはなしのいえ/実教出版 放射能倶楽部/三重・チェルノブイリ被曝児童救援募金/(株)ジョイメイト/チェルノブイリ子ども基金 奥羽/自治労日野市職員組合/たんぼぼ法律事務所

【8 月】日本キリスト教団 広島船越教会/(株)ジョイメイト/木村眼科クリニック/(株)音楽センター/トランスフェリックマネジメント

## NPO 法人 認 証 10 周 年 記 念 企 画

# 被害者の側に立ち続けるフォトジャーナリスト 広河隆一 写真展

パレスチナ | チェルノブイリ | アフガニスタン | イラク | 福島 ほか



2014.12.12 金 ~ 14 日

時間/10:00~17:00

津リージョンプラザ展示室 **入場無料**

主催 特定非営利活動法人 広河隆一非核・平和写真展開催を支援する会  
事務局:三重県津市 (TEL/FAX 059-229-3078)

<http://hirokawasyashintokaigaten.jimdo.com/>

展示内容:チェルノブイリ、福島に限らず、パレスチナ、アフガン、イラク、アフリカ、アジアなど広河さんの取材を広い範囲で展示いたします。

会場 津リージョンプラザ展示室  
名古屋から近鉄で約1時間。津駅からひと駅先の津新町駅から徒歩数分。市役所隣接。無料Pあり。(問)059-229-3078

# 事務局から

## ■ボランティア募集

◎ニュース発送作業(年4回:3・6・9・12月)

次回 12/20(土)午後1時～4時頃まで

場所:東京ボランティア・市民活動センター

(飯田橋駅ビル セントラルプラザ 10階)

※日程が変更になる場合もありますので、ボランティア参加希望の方は、前日までにご連絡ください。

【問い】平日午前10時～午後5時 留守の場合は伝言をお願いします。T&F 03-5228-2680

◎事務局での平日・土曜日のボランティア作業は不定期に行っています。前もってお問い合わせください。

## ■「基金ニュース」について

募金をくださった方には、使途の報告としてニュースレターをお送りしています。また、ニュースレター購読費(2,000円/年)も募っております。印刷・発送などの経費の残金は、募金として使わせていただきます。

※5頁にお知らせしていますように、ニュースレターは子ども基金のHPでもご覧いただけます。今後、郵送がご不要の方は、お手数ですが事務局までご連絡をお願いいたします。

## ■書籍のご案内

『届けたい! 思春期の心のメール 中学校の美術室から』

著者:中谷 碧都梨 文芸社 定価(2,000円+税)

チェルノブイリの子どもが描いた自画像(絵本「生きていたい! チェルノブイリの子どもたちの叫び」(チェルノブイリ子ども基金編/小学館)を鑑賞した中学生の感想を、ニュースレターNo.94(2013年9月21日発行)の誌面でご紹介しました。その後、美術教諭 中谷碧都梨さんは、中学生が制作した美術作品を通して生徒の思いなどをまとめた書籍を自费出版されました。「子どもの願いや夢、希望を受け取ってほしい」と話しています。

チェルノブイリの子どもの自画像についての感想は、p.105<第三章-4 3.11と子どもの表現(1)チェルノブイリを感じ取る>に掲載されています。

書店で注文できるほか、中谷さんに直接注文すると1,620円になるようです。お問い合わせは中谷さんまで(083-772-4528)。



## ■寄贈品のお礼

三重・チェルノブイリ被曝児童救済募金さま、飯吉正志人さま、中嶋えみ子さまより、子どもたちへのお土産として、タオル、ストラップ、手作りカードをいただきました。保養の子どもたちに手渡しました。みんな大喜びでした。また、藤田進さまからいただいた大相撲カレンダーは、ベラルーシのサナトリウム「希望」で開催した「日本紹介展」の会場で展示されました。その後、施設内の子どもたちによく見るところに飾るとのことでした。ご寄贈をまことにありがとうございます。

いつもあたたかいご支援をありがとうございます。振込用紙と領収証につきまして、みなさまにお知らせとお願いです。

### すべての方に振込用紙を同封しております

事務作業の都合により、まことに勝手ながらすべての方に郵便払込用紙をお送りしております。決して募金を強要するものではありません。また、すでに通信費・寄付金を納入された方はどうぞご容赦ください。

**払込取扱票のお名前・ご住所は楷書でご記入ください**  
郵便局からは払込取扱票のコピーが届きます。文字がかすれて判読しづらい場合がございますので、楷書でわかりやすくご記入ください。

**「受領確認の葉書」をご希望の方へ**  
通信費・寄付金を納入された方で、受領確認の連絡をご希望の方には、葉書(金額は記載せず)をお送りします。振込用紙の該当欄に印をつけてください。

**「領収証」が必要な方へ**  
郵便局払込取扱票の「払込受領証」は公に認められる領収証です。大切に保管ください。別途領収書が入り用の際はお申し出ください。

## ●チェルノブイリ子ども基金 NEWS 年4回発行●

〒162-0816 東京都新宿区白銀町25 メゾンド原207号室 Tel/Fax 03-5228-2680

ウェブサイト=[http://homepage2.nifty.com/chernobyl\\_children/index.html](http://homepage2.nifty.com/chernobyl_children/index.html)

E-mail: [chern1986@tokyo.email.ne.jp](mailto:chern1986@tokyo.email.ne.jp)

事務局ブログ ◇神楽坂事務局だより <http://blog.goo.ne.jp/chno1986jimukyoku/>

※当基金は任意団体のため、ご寄付は税金控除の対象とはなりません。ご了承ください。